Citizens' Science Initiative Japan

Citizens' Science

市民科学

2005年 9月号

第5号

CONTENTS

2 インタビューシリーズ「市民の科学をひらく」
第3回 いるふぁ代表 大谷ゆみこさん

8 「不妊治療アンケート」の結果から
生命操作プロジェクト報告

12 JST 研究報告のページ④
患者学的アプローチによる「医の知」のフレームづくり

18 プロジェクト活動報告～ PJ Report ～
宇宙開発再考プロジェクト「スペースシャトルの引退計画と『きぼう』の運命」
水と土のプロジェクト「『土のバーチャル博物館』構想アイデア探求の旅⑧」

連載読み物

16 出生前診断～イギリスからのレポート～ 第8回 「写真展」 渡部麻衣子

14 投稿「台湾海峡両岸関係と日本」 塩出浩和

15 市民科学研究室「夏合宿」報告

1 目次／フォーラムのご案内

20 7月活動日誌／編集後記

information

第４回市民科学講座 「非電化は愉しい“新しい豊かさ”を創るために」

日時 **9月29日（木） 18:30 ～ 20:45**

講師 **藤村靖之**さん（工学博士・発明工房主宰）

会場 **環境パートナーシップオフィス (EPO) 会議室**

東京都渋谷区神宮前 5-53-67 コスモス青山 B2F TEL 03-3406-5180
銀座線・半蔵門線・千代田線「表参道駅」B2 出口から徒歩 5 分
地図は右記にあります。http://www.geic.or.jp/epo/access.html

◎資料代 1000 円。
◎申し込み手続きは不要。参加をご希望の方は、直接、会場へお越しください。
◎お問い合わせは市民科学研究室 Tel&Fax:03-3816-0574 e-mail: info@csij.org

●講座概要●

電気を使わない冷蔵庫や掃除機をあなたは想像できるだろうか？ それを想像するだけでなく、実際に創造してしまった人がいる。「発明工房」を主宰する藤村靖之さんだ。電気がなくてもホドホドに快適に便利に使える数々の非電化製品たち。その創造の品々は、電気への過度の依存を脱して、エコロジカルな生活を愉しく実現していく術があることを私たちに教えてくれる。

※９月４日（日）午後 11 時からのテレビ朝日「素敵な宇宙船地球号」で、藤村氏がすすめるモンゴルでの「非電化製品プロジェクト」が取り上げられます。

interview

『市民の科学をひらく』第３回

大谷ゆみこさん

食から未来を考える市民ネットワーク「いるふぁ」代表。東京文京区で創作雑穀料理とノーシュガーデザートが自慢の超ユニークなカフェレストラン「Tsubu Tsubu Cafe（つぶつぶカフェ）」を運営。体と地球の生命力を高める穀物中心の食生活を「未来食つぶつぶクッキング」として提唱し、多様な活動を展開（詳しくは、http://www.ilfa.org/ および http://www.tsubutsubu.jp/index.shtml を参照）。著書に『未来食』『野菜だけ』（メタブレーン 1995、2004）『雑穀の書』（木楽舎 2004）他多数。

2005 年 7 月 1 日、「風の舞う広場」にて
聞き手：上田昌文（当 NPO 代表）

●社会を透明にしていく原点として食を考えたい

上田：――大谷さんが食の問題で活動を始められるきっかけは何だったのでしょうか。そのあたりから話を始めましょう。

大谷：食べ物というと「グルメ」、それでなければ「健康」とか「病気」といった視点にフォーカスしてしまいます。私は、いのちを支える暮らしの基盤技術としての食に興味があったので、「私が変わる暮らしが変わる地球が変わる」というメッセージから始めたんです。

――それは何年ぐらい前ですか？

いるふぁとして活動を始めたのは『未来食』[1]を書いた頃だから 11 年前。自分自身の実践研究から始まったレストラン運営や食のセミナーなどの活動は、23 年前には始まっていました。今は「平和のために穀物を食べよう！」とストレートに伝えています。長年の活動の成果で雑穀が栄養価の高いおいしい食品だということが社会的に認知されるようになりましたが、まだまだ普通の人は雑穀のことをあまり知りません。まずは、こんなにいろいろな種類があるということを伝え、そして、おいしいという感動と共に雑穀と出会う機会を増やすために、様々な活動を展開しています。

大谷ゆみこさん

次に、自分の身体を壊すような食べ物は同時に地球環境も破壊しているということを伝えています。以前は「自分の好きなようにご馳走を食べて早死にして、それで何が悪い」と言われると、答えられませんでした。でも、ある時いろいろ調べていって、環境を破壊して生み出された食べ物はやっぱり身体にも悪いし、逆にそういう食べ物を欲することで環境も壊れるということがわかり、「あなたが病気になって死ぬことで、その分だけ地球も壊れて困るよ」と言えるようになりました。

「安全なもの、身体にいいものを食べよう」という発想ではなくて、自分の命の土台である食べ物が自分の知らないところで作られ、自分にとって得体の知れないものであることが問題なんです。それをもっと透明な状態にしたい、今思うとそれが始まりだったかな。社会全体が不透明だから、それを透明にしていく原点として、自分の身体のこと、身体を養う食べ物のこと、食べ物を生み出す大地のこと、そしてそのつながりを全部透明にしていくことをしたいと思ったんです。

――雑穀に目をつけられた理由というか、原点は何なのでしょう？

もともと今の社会の流れに疑問を持っていました。よく考えれば「変じゃない？」って感じることがたくさんあって、でもみんな気づかない。例えば、なぜ病院で子

1『未来食――環境汚染時代をおいしく生き抜く』1996 年、メタブレーン刊

どもを生むのか…これは真弓定夫先生[2]によれば、粉ミルクを普及するためのアメリカの戦略で無理やりそういう仕組みを作ったということだそうです。精神的にも生理的にも違和感をもつような嫌なことが多くなってしまっている、と感じていましたが、でもどうしたらよいのかもわからずにいました。

今のように社会がおかしくなってしまう前の歴史を調べたいと思っても、情報がない。モノはいっぱい溢れているけど私が知りたいことも欲しいものも何もない、そんな渇いた状態にいました。でも渇いているだけでも仕方がないので、一生懸命水脈を探す気持ちで、手当たりしだいやれることをやっているうちに、たまたまその一つとして玄米ご飯を出す自然食レストランに行ったんです。その時に、「あ！」と気づかされました。

私は、文句を言いながらもそれなりに社会に適応して、いろんな食材のことも知っているつもりでしたが、その何でも知っているはずの私にとって知らない食べ物がここにあるということが、まず一つショックだったんです。そして同時に、これは可能性かもしれないと思いました。私の知らない世界があるということは、もしかしたら私が探していた水脈がここにあるのかもしれない、と思えたんですね。玄米ご飯を食べた瞬間、生理的にすごくおいしいと感じました。

●身体が“美味しい”とよろこぶ体験が…

私が育った時代はもう白米が食べられていて、ご飯、味噌汁、漬物の食事でした。私が育ったのはそんなに田舎でもなく、今なら東京から車で1時間半程のところですが、キンピラや手打ちそばがごちそうでした。そのころ家の座敷で開かれていた冠婚葬祭の一番のご馳走は、油揚げ1枚の煮付けでした。

家では毎日、ご飯、味噌汁、漬物、おひたし、夜はうどんという食生活でしたが、学校に行くと、「それは栄養がないんだ、ハンバーグやとんかつを食べなさい」と言われました。でも、どうも変だな、それ以前の日本人って何だったんだろう、と納得がいきませんでした。調べようとしても歴史的に見た普通の生活情報に関する記録はなく、歴史の本もたいしたことなくて諦めかけていました。

もともと、どうしても西洋的なものに対して生理的になじめない部分がありました。本当の情報を求めていたところに、玄米ご飯という、自分が食べたことも見たこともない食べ物がこの世の中にあることを知ったのです。そして、それがほんと美味しかったわけです。

その時初めて、小さい頃のご飯以上に体が喜んでいることを実感しました。私自身、(当時の)栄養学を学んで、肉や砂糖も摂り、ケーキも食べていましたから、今思えば、病気ではないけど便秘がちだったりと、結構体調は悪かったんですね。でも、みんなもそうだけど、若いうちは気力があるからその不調を感じなかったんです。ところが、玄米ご飯でどんどん身体が元気になっていくし、身体が喜んでいる、身体が美味しい、という独特の衝撃があったんですね。最初は何だかわからず、しょうゆで炊いたご飯だと思ってたずねたら、「これが本当のご飯だ。人間は穀物と塩と取れたての野菜があれば生きていける、それも年に60kgでいい」と言われて、「これは水脈かもしれない」と思ったのです。

人の食べ物の原点が「穀物と塩と野菜」だという事実に驚きました。それで、この水脈をたどるとどこまで行けるのかと、希望と好奇心がむくむくと湧いてきたんですね。それまで手ごたえのない生活をしていましたから、この際全部ひっくり返し、それしか食べないとしたらどうなるか、どうしても知りたくなったのです。本物かどうかを確かめるためにも思い切ってそれまでの食事をやめて、本当に必要なものだけで生きてみようと考えました。

――自分の体で検証する、ということですね？

もしそれが本物だったら、私や世間がこれまでやってきたこと、例えばあの栄養学っていったい何だったのか、ということになります。「自由になれるかもしれない！」と思いました。

私はずっとこの社会から脱出したいと思っていて、でもがんじがらめで、どうやって出たらいいかわからないと思っていたんですが、これで私だけでも出られるかもしれないと思って、徹底してやりました。それを知ったのが30歳のときですから、ちょっと遅くて損した感じがしましたが…。

かすかな手ごたえもあった一方で、本当にこれで満足できるとも思えないような不信感、不安感もありつつ、おそるおそるやってみたら、思ったより面白い。粉を炒めて水を入れればシチューやホワイトソースができるといった、今まで誰も教えてくれなかった知らない技術を知ることそのものが感動でした。それまでは料理というと、使ったこともないような食材やらを買いにいく必要があって、一つ一つがどういう味かもわからないものをただ入れているだけで、「操り人形」みたいで嫌だなあと感じていました。料理は単純で何の可能性もないつまらないものだと思っていたんです。ケーキを作ってみようと思ったこともありましたが、「粉100gに砂糖100g」って書いてあるのを見て、「えー、これは嫌だな」とも。もっとも食べることはやめなかったんですけど…。

2：真弓定夫＝小児科医。自然流の育児と健康法を実践・提唱している。主な著書に『お母さん！アトピーから赤ちゃんを守ってあげて』『自然流育児のすすめ』『医者の門をたたく前に』など。

ところが（「穀物、塩、野菜」の料理を）始めてみて、これは操り人形ではないと感じて、日本の伝統食文化に対する信頼を取り戻しました。穀物にこそ栄養があって、それをおっぱいのようにうれしく食べて、その味を引き出すために海の結晶である塩をちょっと入れて、それをあるところまで入れると突然美味しくなる…、そういったことがわかったわけです。料理は音楽に似ていて、音階と同じように「味階」というものがあります。「薄味で美味しい」から「濃くて美味しい」まで、幅もあります。体調にもよりますが、塩をある程度入れないと絶対うまみは出ません。材料と塩に本気で向き合うと、突然美味しくなる時というのがあります。料理をする時、材料にさわると、こんな風に切ったら、こんな風に組み合わせたらおいしいというイメージが湧いてきてどんどん手が動き出します。即興でリズムとメロディーを奏でる感覚です。材料を炒めていると、「このくらい油ほしいな」とか「このくらいしょうゆ欲しいな」ということを手が教えてくれるようになります。不思議なことにほとんどはずれません。鍋の底と火としょうゆと私の一体感、本当に不思議ですよ。みんなには伝えるためにレシピ化せざるをえませんが…。

感動の料理三昧の日々を送っていた時にふとしたことから、穀物の仲間の雑穀にたくさん種類があることを知りました。古代から日本の食卓で主食の座を占めてきた雑穀が消えてしまった、という歴史を知った時、新しい水脈が開けたことを感じたのです。雑穀の歴史を紐解けば、砂漠に放り出された私が、砂漠化していなかった頃の森を蘇らせることができるのではないか、と思いました。

●雑穀は刷り込まれた価値観を崩す力を持ってるんです

――雑穀に出会われたのはいつ？

今から22年ぐらい前です。その10年ぐらい前から、食の問題とか複合汚染の問題とかが出て、結果としてアトピーの増加が問題になった時期がありました。松村龍雄さんというお医者さんが、慣れない穀物を食べることでなんとかアトピーを回避できるんじゃないかと提案し、回転食として米以外の穀物を毎日違う種類食べることを勧めたんです。でもその頃は誰も炊き方とか知らなかったので、ほとんどの人は、10分ぐらい煮た炊けていないものを食べていたのです。最初から美味しくないと思っているから、「10分煮る」と書いてあったら、芯のあるものでも我慢して、病人食のような形で食べられていたのですね。一方で地方へ行くと、先祖代々食べられてきたものを消してはならないとずっと食べ続けていたおばあちゃんや、雑穀を好きな人たちがいて、歴史は細々とつながっていました。

一度は消えかかっていた雑穀が社会全体に知られたのは、アトピーがきっかけだったと思います。医療食ということでアレルギー専門食品店で売られていました。アトピーが出てきたことも何か警鐘としての意味があったのだと思いますが、それになぜか雑穀が結びついた。不思議じゃないですか？　米を食べるとアレルギーになってしまうので、他の穀類である雑穀に眼を向けたわけですが、治療食としてあったわけで一般的な主食としては見られませんでした。私もそれまで見たことも食べたこともなかったのですが、自然食品店で見つけて、穀物の仲間がこんなにあったことに感動しながら炊いてみたら、何しろ美味しかった。

そして、私は、それまで雑穀を見たことも食べたこともなかったのに、雑穀というのは大昔の人が貧しい中我慢して食べた、不味くてぼそぼそした栄養のない食べ物だ、とはっきりと思っている自分に愕然としました。自分で何も体験していないことにまで知らない間に事実ではない価値観が刷り込まれていることをはっきり認識できたのです。それに反して、雑穀は調べれば調べるほど、栄養があり、歴史も深く、地域的特徴がありかつ国際性もあることがわかってきました。事実とは反対の見方が雑穀に被せられていて、雑穀は歴史の彼方に消えようとしていたわけです。

それまで、刷り込まれた価値観をまず脱がないと人は自由にならない、と思って脱ごうとすると、ほとんど肉化した包帯みたいに癒着していて、どこまでが自分なのかわからなくなっている。雑穀に出会って、刷り込まれたイメージと現実の違いがこんなに違うということを、過去のものではなく今ここにあるものによって、確認することができることに感動しました。雑穀を通して誰もがリアルに真実に触れることができるのです。

どこまでも行っても答えのない焦燥感みたいなものがあったのに、ここにある食べ物が事実を突きつけてくれるなんて！　私たちが歴史のひずみから自由になるにはこれしかない、と思わせるほどリアリティーがありました。毎日食べられて、食べるとすぐ身体が変わる…。雑穀のすばらしさ、おいしさに感動して、私の水脈探検は、さらなる確信に満ちて進むようになりました。

どんどん体調がよくなり、どんどん自分の暮らしが透明になっていく。この気持ちよさ。今まで見えなかったことが、わーっと見えてきました。

――その過程で、美味しく食べられるレシピを自分で作りだしていくことと、もう一つ、仲間に声をかけて活動として成立させることとがあったと思いますが。

デザイナーだったから何かを見たらその本筋を見て、それをデザインし直す仕組みの頭になっていたんです。それから私は、物心ついた頃から社会観察というものを丹念に続けてきました。社会はどういう仕組みになっているのか、なぜ誰も悪くないのに結果が悪くなるのか、ということをずっと見て考え続けてきました。

その結果、強固に固まっている社会を自分独りが変えることはできないと思ったので、まずは自分が脱出するためにどうしたらいいか、ということから始めました。そして、本当の食に出会ったのです。こんなにすばらしい水脈を見つけたのに、独り占めにしておくのはもったいない、本当のことを知ってしまった以上、それ以外のことをやりたくなくなって、それを仕事にするのが一番いい、と思ったんです。

――そうできれば、ほんとうにそれが一番いい。

自分が発見してこんなにわくわくして幸せになっていったことを、以前の私みたいに渇いている人がいたら、その人にだけは情報を出したい、と思ったわけです。私はこれを人に広めたいと考えているのではなく、私のように望んで渇いている人がいたら、出会うチャンスは用意したい。自分自身が本当にそういう考え方にそって透明な日々を楽しく生きることで、その楽しさの技術、自分が幸せになれる技術をみんなに教え伝えることが仕事にできれば、と思ったわけです。

●社会は“自分”の集まりなんだ…

この 20 年の間に、「万人のために社会を変えよう」と言ってつぶれてしまう人をたくさん見てきました。私には“万人”というありもしないものを想像することが失敗の原因だと思えました。私が以前やっていた観察の中で、社会って何か、家族って何か、私って何かを考えてきました。それらを通して、ある時までは社会と自分というのは、強固などうにもならない巨大な怪物、大きな岩のような固まりと自分といった敵対的な感じがあり、出来上がってしまった社会の中で、自分一人が何をしてもどうにもならないのではという無力感がありました。

でも、ある時ひらめいたのです。どんな人だって生まれた時は赤ん坊で、よくわからない社会に後から生まれ、不安におののきながら生きている。その一人一人が集まっているのが社会であって、みんな私と同じように不安なんだと考えるようになりました。個々人の性格は多少違うかもしれないけど、歴史の中ですでに出来上がってしまった社会に生まれ、そして必ず死ぬ命を持ち、どんなに権力があっても一日は 24 時間しかない…という原点に共通項を持った人間が人数分だけ集まって社会を作ってるんだから、私が変われば社会が変わるんじゃないか、と思えるようになったわけです。

それを日本語で表現するのは難しかったから、社会を society と言わず、自分の複数の集まりと考えて「myselfs」と呼ぼうと決めました。その社会を良くするためには、社会や自然界や生まれてきた場所や生きていることを自分が一番に楽しみ幸せになることが大切だとはっきり思えるようになったのです。自分が幸せになる方法もわからないのに、人を幸せにすることはできない、そう考えたのです。例えば原発の問題がなかったらどう生きたいか、というビジョンのないままに活動している人がいます。そうすると常に何か反対するものが必要になってしまいます。反対していることが仕事になってしまう…。

――反対すること自体を自分のアイデンティティにしているんですね。

そういう役割だとどうしてもそうなりがちだけど、もしも原発がなくって、もしも戦争がなかったら私はどう生きていたいか、というビジョンを自分の中で育てながら活動することが必要だと思っています。自分の命こそが一番身近な自然であって、これを本気でだいじにすることからすべてが始まるのです。

環境運動をしている人は特に、大きな問題を前にして個人のことを考えるのはエゴだ、瑣末なことだというふうに考えている人が以前は多かったのです。環境問題が注目され出してからも、結局一番身近な環境である「食」が商売のネタか非常に瑣末なもののようになってしまい、あまりにも真剣に取り組まれないという現実がありました。私は「未来食」という言葉を提示しましたが、この言葉で、食べ物と命、食べることと向き合う、生きる姿勢として何を食べるかを考え、透明な暮らしを求めるという姿勢を伝えたいと思ったのです。

その結果、今現実にゆがんだこの社会でどう食べていくかは次の問題で、姿勢の問題なので選択肢はいろいろありますが、何を選択するにしても本当のことを知ることがまず大事だと思うのです。その姿勢として『未来食』では、あなたの身体が壊れた分だけ地球も壊れるんだから、一番に、誰かを搾取し人権を蹂躙する歴史の中で生まれた食べ物は阻止しようと提案しています。

コーヒーはだめ、バナナはだめというアプローチでは説得力もないしつづきません。目の前にある食べ物が美味しくて明日も食べたいと思えるレシピや、今のスピード社会に合う簡単な料理法が大きな力になります。「ああ、私はそのためにデザインの仕事をやってきたんだな」と思ったほどです。60kg の穀物と塩と野菜があれば生きていけるんだから、理屈を言わなくても、食べてみんなが美味しいと言ってくれる食べ物を広めて地球をひっ

くり返すマーケティングを展開していこうと思っています。

●いったん徹底して受け身で生きてみると…

20年前、最初は自分が変わるために私が「脱ぐ」期間が必要でした。地面が生きている場所で、現代の社会と仮にでも離れた環境を作らないと自分が脱ぐことができないと考えました。田舎に行けば何かが解決すると思ったわけではありません。田舎には田舎型の問題があるし、都会には都会型の問題がありますから…。最初の8年ぐらいは東京にいてもできる自然療法や作物の作り方、料理などを習ったりしながら、価値感や暮らしを変えていきました。気がついたら、東京にいる必要のない暮らしになったんです。これはちょうどいいから実験しようと考え、どこか自然がいっぱい残っていて、食べ物が作れる大地が残っていて「ご近所」のない場所はないかと探して山形県の山の中へ引っ越しました。

その時考えたのが、思い切って何も考えないようにしてみようということ。自分のものでない刷り込まれた価値観から自由になれなければ意味がないと思ったので、それまで、自分の好みの色はこの色、という感覚で生きていたんですけれども、私がゼロになるために、思い切って何も考えないようにしてみようと…。そうしたら、それまでは自分が何かしなければ何も起きないと思い込んでいましたが、時が来ればことは起こるということがわかったんです。意欲的に積極的に生きなさい、という考えをすっぱり捨てて自分を自由にするために、状況に身をゆだねて受身で生きるということをしてみました。

柱と布とロープがあれば1日で住めるようになる直径も高さも5メートル40センチのインディアン・テントを建て、ただそこにいて、ご飯を作って、耕して、子供たちと遊んで、何も計画しないでまるまる5年ぐらい暮らしました。そうしたら、小国町に住む人たちが、「そんな山奥にいないで山里に下りてこないか。」と誘ってくれました。小さな手作りの小屋での山奥の暮らしも、自然と自分たちだけの不思議な開放感ですばらしいものだったのですが、そろそろ、人の中に入って暮らしても揺るがない力がついたかなという自信も出てきていたので、1995年に、山奥から車で40分、新潟県境の小国町の奥に引っ越しました。

ちょうどそのころまでに、自然と向き合う受け身の暮らしの楽しさや感動を、もっと多くの人たちと分かち合いたいという思いがむくむくふくらんできていました。引っ越しをきっかけに何家族もが家族のように過ごせる大きな家を作れないかと思い始めましたが、お金に縁のない暮らしだったので、ここでも自分たちで、できるところからこつこつ作っていくしかないと仮住まいの道路沿いの車庫作りから始めました。たった9坪の土台のブロックを子供たちも手伝って積むのですが、1日に1段もできないのです。通りかかる集落の人は、今日は何段だったと結構楽しんでいたようですが……。

それでも、いつの間にか、建坪48坪、床面積110坪の「いのちのアトリエ」が建っていました。今でも作り続けている途中ですが、土地の人も驚くほど快適な家です。

――そのように山形での暮らしがある形をなしてきて、そしてまた東京に関わるようになる何かきっかけというのは？

私が山形に引っ越しするとき、東京の仕事の仲間たちは「私たちは山形で生活することは出来ないわよ」と言い、東京に残ってレストラン運営などの活動を続けることになったので、年に9回、東京に出て、セミナーを運営することを私の役割とすることにしました。2～4月、5～7月、9～11月に3回連続コースのサバイバルセミナーを開催することで、1年のうち、7月後半から9月後半までの2ヶ月と、11月後半から2月後半までの3ヶ月、併せて5ヶ月は東京にまったく来なくていいというふうに設計しました。山形ではお金はほとんど必要ないけれど東京にいる仲間はお金がないと身動きとれないので、その分の最低費用は活動で生み出せる工夫は必要でした。おかげで、山にこもりっきりではなく、活動が育ったんだなあと今は感じています。

いのちのアトリエの暮らしを体験してもらうオープンハウスというのを年に5，6回開催していますが、東京の活動を入り口に、多くの人がここで心通う時間を過ごして、暮らすことの本当の楽しさに気づいていきます。いるふぁの収入源としても十分機能しています。

――そのように、現在の経済を完全に否定することはできないので、それに乗っかりながらも、現在の経済が持っている縛りのようなものをどうやって変えていくかという発想が必要だと思うんですよね。

なかなか手強いですけれどね。個人の場合はよくても、それが集団になった場合できるのかというところが、私の一つのテーマでもあります。

――新しいことを始めて、人が集まってきて一緒にやりましょうとなったときに、それによって食べていかなければいけないということを考えた場合、長い目で見て「集合住宅的な発想」を生かすためのもっと上手い方法を出せて、お金をかけなくてもみんなが満足するような生き方の方向はありうると思うんです。

うちの住まいなんか個室はほとんどないけど、みんな

・「未来食アトリエ風」での料理教室 & 研究会
雑穀と旬の野菜を使った「未来食つぶつぶクッキング」の教室と研究会を行っている。
・「つぶつぶカフェ」、「粒粒 SHOP」、「風の舞う広場」、
食べておいしさを実感してもらうカフェと、生産者から仕入れた安全な食材やツールを販売するお店を運営、自然建築の貸し切りのパーティーホールも運営。
ライフシードキャンペーン
雑穀を種から育てる仲間や本格的な生産者を増やすため、毎年春に在来種・無農薬無化学肥料の雑穀の種と栽培レシピを販売。公開栽培講座などの種まきイベントも行っている。
・エコケータリング
スローでグルメな「つぶつぶ料理」をパーティーや会合で体験できるように「チーム E」という、ピースアースフードパーティーサービスを専門に請け負う会社を設立。桐の箱で運ぶ、つぶつぶ料理が人気。
・つぶつぶ食塾
毎月 1 度、“つぶつぶ的”な食文化や暮らしの専門家を招き、未来を創る食の情報、ピースアースな暮らしの知識・視点・方法を学ぶ勉強会を開く。
・書籍の出版
年 3 回発行の保存版「つぶつぶ」の定期購読者を募集中！ いるふぁ会員には毎号届く。
つぶつぶ料理からナチュラルスィーツまで、「未来食アトリエ風」のオリジナルレシピ満載の料理本を始め、エッセイや雑穀を楽しむための書籍を多数発信。
・山形オープンエコハウス「いのちのアトリエ」
大谷ゆみこさんが家族と暮らすエコハウスを一年に数回公開。参加者は宿泊し、“つぶつぶライフ”や大家族のエコロジーな暮らしを体験できる。

楽しそうですよ。判断力のない子供にテレビと個室を与えて「まともに育て」って言う方がおかしいですよ。常にいろんな人と触れ合って刺激を受けて、そして何かおかしかったら「それはおかしいね」って言ってもらえる環境が大事ですよね。昔は家の中に社会があったんです。今でも先住民の暮らしには残っています。例えばサラワクの森にある「ロングハウス」みたいなものです。

――そうですね、かつては下町でしたらどこにでも「長屋」みたいな家は存在していましたね。

実体験として、長屋みたいな住まい方をやってみると、本当にみんな変わるんです。昨日までまったくの赤の他人だった人が、同じ家の中でこんなに楽しそうにお互いのことを思いやりながら、こんなに平和に、何の気兼ねもなく暮らせるのに、どうして今の社会はこんなになっているんだろう、不思議だなと思います。そういうものを育てていけば、何か変わるんじゃないかと思います。

●科学とも連携した食のパラダイムシフトを起こしたい

――今はとても幅広い活動を展開しておられますが（上記の表参照）、これからの活動の目標は？

今後のミッションとしては、本当のおいしさを体験する場としてのレストラン「つぶつぶカフェ」と、ピースアースフードパーティーサービスの仕事を通して、個人だけでなく社会全体の食卓のあり方を変化させることを考えています。そのために、学問として「食学」という分野を確立させるにはどうしたらいいかと考えています。食べ物の成分にとどまらず、「料理と身体」という視点から食を捉えなおすことが必要だと思います。「食学」をベースにした生命力を高める食のデザイン、という概念も育てたいと思っています。見て感動、食べて口の中にはじける味わいと食感、そして、生理的栄養バランスをトータルにデザインする「食デザイナー」を養成していかなければと思います。具体的には、アカデミックにやっていく方法と、現実的に実践していくという方法、両面からのアプローチが必要です。究極の目標は、食に関するパラダイムシフトですが、まずは、韓国料理やフランス料理と並んで「つぶつぶ料理」という食のジャンルが市民権を得ていくところを目標に、活動を進めたいと思っています。今までの栄養学を否定するのではなく、進化させるという考え方が大切だと思っています。そのために例えば企業と連携して、社会が食について考える形を作れないかと。

今までお話してきたように、いるふぁの活動は非常に多岐に渡っています。魅惑的でおいしい料理は山ほど生まれているので、そのおいしさを体験してもらうことが今は一番必要なことです。広めるためには魅力的なカフェが必要なんです。活動をもっと整理した方がいいのかもしれないけれど、どれもがつながりあって社会を変えていく力になっている。どれか一つではだめなのよね。これからどうなっちゃうのかしら（笑）

――いやいや、とても希望に満ちた話ですよ。

地球や生命を敬うという当たり前の感覚にもっと気づいていくことが必要で、穀物を食べ込むことで初めて本来の「人」に戻れるんじゃないか、というメッセージを出していきたいと思っています。

――一緒に頑張りましょう。今日は本当にありがとうございました。

大谷さんのご活動がテレビで紹介されます。
9 月 3 日（土）午後 1 時 55 分～ 2 時 25 分、テレビ東京
「ザ・ドキュメンタリー ～大地のキッチンから・
大谷ゆみこの雑穀料理ワールド～（仮）」
山形と東京を拠点に「キッチンから未来を変える」「平和のために穀物を食べよう」と呼びかけて繰り広げられる、大谷ゆみこさんの様々な活動をドキュメントした 30 分番組です。

生命操作プロジェクト報告

「ベビーコム 不妊治療アンケート」の結果から

●はじめに

英国で世界最初の「試験管ベビー」（体外受精児）が誕生したのは 1978 年。以後、しだいに先端的な生殖医療が社会に浸透し、今や日本でも、先端生殖医療を受けることも体外受精で新生児が生まれることも決して珍しいことではなくなっている。表に見るように、2001 年では体外受精あるいは顕微授精で生まれた子どもは 1 万 3158 人だが、これは新生児のおよそ 90 人に一人に相当する数だ。また、2003 年の患者数 46 万人は、1999 年の調査時には約 28 万 4800 人であったことと比較すると 4 年間で 1.6 倍の増加を示している。結婚したカップルのおよそ 10 組に 1 組が不妊に悩むといわれている現状おいて、不妊治療が社会に広く行き渡ってきている、と言えるだろう。

・不妊治療の患者数：約 46 万 6900 人　（2003 年厚生労働省の調査）
・非配偶者間人工受精（AID）と体外受精・顕微受精：
　2001 年では AID 患者数 1322 人、AID 出生児数 161 人（累計 1 万人以上）
　2001 年では体外受精・顕微授精の患者数 5 万 3204 人
　　体外受精の出生児数 8296 人（累計 5 万 9265 人）
　　顕微授精の出生児数 4862 人（累計 2 万 5704 人）
　（日本産科婦人科学会の調査）

しかしながらこの技術は、治療効果が高まってきたために普及するようになったわけではない、という点に一つの特徴がある。実際の治療成績は、日本産科婦人科学会の調査では、体外受精と顕微授精の妊娠率でみてそれぞれ 21.7％と 20.2％だから、決して高いとは言えない（しかも妊娠しても流産するケースが約 4 分の 1）。

高まる普及率と低い成功率という 2 つの数字からほの見えてくるのは、多くのカップルが自分の子どもを手にしたいがために治療の回数を重ねている姿だ。それは患者にどんな心身や経済面の負担をもたらしているのか？　その負担に堪えながらなお治療を受け続けるとすれば、そこにはいかなる背景的な問題が横たわっているのか？　不妊治療は“納得のいく医療”たりえているのか？　不妊治療を選ぶ・選ばないの選択の分かれ目はどこにあるのか？

こうした疑問を考えていくには、不妊治療を受けた当事者の声に耳を傾けることが何より必要だ。しかしこれまでなされた当事者の声の収集と分析で、100 名を超える規模のものは、『新・レポート不妊～不妊調査の実態と生殖技術についての意識調査報告』（フィンレージの会編著、2000 年）や雑誌『主婦の友』が実施したアンケート（2004 年 10 月 12 日放送の NHK クローズアップ現代「広がる不妊治療・悩む女性」で一部が紹介された）を数える程度であった。

市民科学研究室「生命操作プロジェクト」は、こうした現状をふまえて、患者当事者の声をできるだけ広く収集し、そのデータをもとに不妊治療の問題点を私たちなりに整理し、当事者に限らない広い層にこの問題を共に考えていくきっかけを提供することが重要ではないかと判断した。そこで、現在連携しているコミュニティ・ウェブ「ベビーコム」（『市民科学』第 4 号に代表の鈴木賀世子さんへのインタビューを掲載）が 2002 年 10 月～ 2003 年 10 月に実施した「不妊に関するアンケート」のデータを用いて、考察してみることにした。

アンケートは 30 の質問事項からなり（表参照）、235 名の不妊治療経験者が自発的に答えを寄せてくださった。このアンケートの大きな特徴は、単なる○×の記入に留まらず、回答者が事実の詳細を補足説明する部分を多く設けていることだ。この詳細な書き込み部分の解析は現在手がけているところなので、ここではまず統計として数字に表れてきたものをいくつか紹介してみよう。したがって本報告は不十分な紹介に留まることを、あらかじめお詫びしておく。アンケート全体の詳細な解析は、9 月末日にベビーコムならびに市民科学研究室のウェブサイトで公開する予定である。

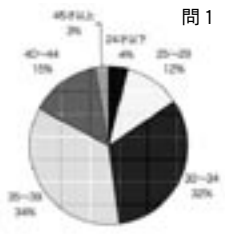
「不妊に関するアンケート」の質問項目

問 1：現在のあなたの年齢
問 2：ご職業
問 3：住んでいる地域
問 4：現在の状況を教えてください。
問 5：結婚後、どれくらいで治療をはじめましたか。
問 6：不妊治療を受けている、あるいは受けていた期間について。
問 7：不妊に関するどのような検査を受けましたか。
問 8：問 7 の中で精神的に肉体的に辛かったものがありますか。それはどれですか。
問 9：パートナー（男性）はどのような検査を受けましたか。
問 10：問 9 の中で精神的に肉体的に辛かった、あるいは不快だったと言われたものがありますか。それはどれですか。
問 11：検査の結果はどのようなものでしたか。
問 12：不妊に関するどのような治療を受けましたか。
問 13：複数解答された方は、それらの治療をどのような順で受けられましたか。
問 14：問 12 の中で精神的に肉体的に辛かった治療はありますか。それはどれですか。
問 15：通院の頻度はどれくらいですか。
問 16：インフォームドコンセントについて伺います。検査や治療について、医療機関で十分な説明を受けましたか。それはだれからの説明でしたか。
問 17：現在行なっている治療、あるいは続けていた治療を納得していますか。
問 18：問 17 の答えに関して、それはなぜですか。
問 19：治療の途中で病院やクリニックを変えましたか。
問 20：さしつかえなければ、検査と治療にかかった費用の総額を教えてください。
問 21：医学的な不妊治療のほかに代替療法をとり入れていますか。
問 22：ライフスタイルの見直しなど、日常の中で工夫されたことはありますか。
問 23：不妊治療に関して、だれに相談や話をしていますか。
問 24：妊娠された方にうかがいます。治療後何周期目、あるいは何年で妊娠しましたか。
問 25：妊娠の経過について。
問 26：妊娠中、出生前診断を受けられましたか。
問 27：治療中の方は、今後どのような治療をのぞんでいますか。
問 28：治療を続けるにあたって、仕事を継続することができましたか。
問 29：不妊治療を続けてきたお気持ちや、感想をお聞かせください。
問 30：不妊医療に望むこと、問題点、改善点などがあればお書きください。

●「不妊に関するアンケート」回答結果

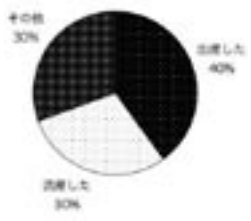
まず、不妊治療を受ける女性の年齢をみると、30 代後半の人が過半数であること。この比率が日本全体で言えるかどうかは保留しなければならないが、ベビーコムに集う人々には「高齢出産」をこれから体験する／すでに体験した人たちの割合が比較的高いことを反映しているとすれば、このアンケート全体が「高齢出産」との関連をいくらか強く示すものとみなすこともできるだろう。

問 1



さらに、このアンケートでは「妊娠の経過」において不妊治療を受けて出産した人が 40％、流産した人 30％、その他（治療の途中で妊娠中のケース、妊娠には至っていないケースなどを含む）が 30％という構成になっていることを念頭におかねばならない。

問 25



検査結果で目立つのが「とくに問題なし」である。これは問題が特定できず原因が不明であることを意味しており、不妊の原因がわからないまま治療に向かう人が多いことを伺わせる。

■検査結果 (複数回答)

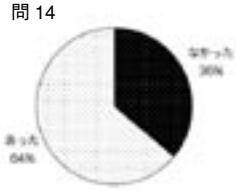
とくに問題なし	83
排卵障害	46
黄体機能異常	49
卵管閉塞	24
子宮内膜症	27
不育症	3
その他	81

不妊治療は、一つの方法が（ある回数を重ねて）成功しなければ次の方法に移行する、という具合で進むため、このデータと他のデータ（たとえば問 11）の相関を調べることで、いかなる状況で次の段階の治療を受ける選択に踏み切るかが、ある程度見えてくるものと思われる（現在解析中）。

■不妊治療方法（複数回答）

タイミング法	173
排卵誘発剤	169
卵管鏡下卵管形成術	2
体外受精	58
顕微授精	32
非配偶者間体外受精（精子提供、卵提供）	4
その他	71
代理母（配偶者間 or 非配偶者間）	0

問 14



一番重視されるべきは、治療の際に精神的・肉体的に苦痛を被ったか否か、被ったとすればどんな苦痛かという点だが、「あった」が 64％という結果になっている。

回答者が記した苦痛の中身は、おおまかに分類して下表に示した。このアンケートで報告されているわけではないが、排卵誘発剤の副作用による死亡や後遺症の発症が報告されている（厚生労働省医薬安全対策課の集計で、1994 年～ 2001 年で副作用報告 440 件中死亡 5 名、未回復 7 名、後遺症 20 名（失語症、半身不随、卵巣摘出など））。それに至らなくても、このアンケートでも少なからざる人が、卵管造影検査や体外受精の採卵で激痛を感じたことや、排卵誘発剤や体外受精前後のホルモン剤の投与による副作用で苦しんだことを記している。

精神的苦痛も一通りでないことが伺える。10 名ほどの人が「出口の見えないトンネル」という同じ表現を使って治療のつらさを語っていたのは特に印象的だ。

【精神的苦痛】

(1) 妊娠に至らないということ・自分は一生子どもを持てないのではないかという不安

「何でこんな辛い思いをしないと妊娠できないんだろう」（くりかの　さん）

(2)「夫婦」がキーワードになるもの

排卵に合わせた性生活が義務的になっていること・治療に関する夫婦の温度差・タイミング法で双方の生活のリズムを合わせる必要があること

(3) 病院側・医療関係者の配慮が欠けていることに対して

(4) 治療が生活の中心になり、それを中心に生活していること

会社に勤めながらの通院（注射）は、本人が時間的に辛いだけではなく、勤務状態に支障をきたし、人間関係のトラブルのきっかけとなりうる。

(5) 治療内容に関すること

男性不妊がわかるまで 4 年間も排卵誘発剤だけで治療してきたこと。（せん　さん）

卵管閉塞が疑われている状態で、とりあえずは排卵をチェックすること。早くステップアップしたい。（ゆう　さん）

【身体的苦痛】

(1) 薬の副作用で苦しんだという人が多い

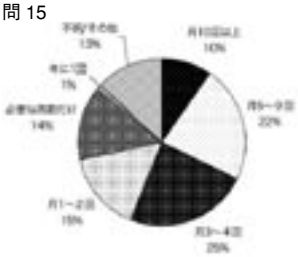
採卵にショックを起こした・麻酔の副作用・排卵誘発剤による吐き気・嘔吐・腹水・浮腫など

(2) 排卵誘発剤の注射に通うこと・副作用がある中での毎日の通院

(3) 採卵時の痛み

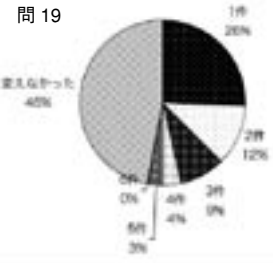
(4) 治療と仕事の両立の困難

問 15



通院の頻度は、「月 3 回以上」が 57％に達する。このデータと治療期間のデータ（問 6 、最長では 14 年に及ぶ治療を受けた例がある）を重ねると、通院だけでもかなり負担が大きいと推測できる。

問 19



ここでさらに問題を複雑にしているのは、「治療に納得がいかない」ために医療機関を変えたケースが半数以上あることだ。中には 5 回病院を変えた例がある。

治療についての納得度は「あまりしていない」と「していない」をあわせて 24％。4 人に 1 人が納得のいかない治療を受けている状況――なぜそうなってしまうのかを詳しく分析していかねばならない。

患者の負担という点では、高額の治療費をかけている場合が多いことも見落とせない（問 20、最高は 11.5 年で 1500 万円、数百万円はまれでない）。さらに、治療を受けるために退職した人が少なくないことも、不妊治療の負担

問 28

の特殊性を浮き彫りにしているように思われる。

なお、フィンレージの会の調査によると、治療年数の平均は 4.3 年、最長で 18 年。通院施設数は平均 2.7 カ所、最多で 15 カ所。体外受精・顕微受精は 1 回当たり平均で 35 万円～ 45 万円かかり、合計で 100 万円から 300 万円。中には 400 万円以上の人もいた。

回答者が記したコメントの中には、「専門のカウンセラーが欲しい」という意見がかなり多く、そのリクエストは「流産した人へフォローがない」「不妊は本人が“悪い”のか？」「治療の全体像の説明がなく何をどう選択してよいのかが見えない」「どこで止めるべきかのアドバイスがない」というものがあった。これらは、患者の精神的負い目や不安や疑問への（当然あってしかるべき）対応がないがしろにされていることへの不満と裏腹になっていると思われる。医療機関が行う治療への評価システムがないために、複数の通院を余儀なくされた人から「病院で治療の差がありすぎ」との指摘がなされたり、「医療者や行政関係者は患者の声を聴いていない」という批判が出てきたりするのだろう。あまりに大きな経済的負担に「不妊治療を保険適用にすべき」という声が多数発せられていたし、「高額なのになぜそれほどの金がその治療にかかるのか、説明がない」という不満が上がっていた。

●生命操作プロジェクトですすめるべきこと

ベビーコムのアンケートの結果の概略を紹介したが、ここから浮かび上がってくるのは、次のような姿ではないだろうか。不妊治療が“先端”とは言われながらも、不妊の原因を突き止めきれないまま、しかも治療成績も芳しくないままに、新技術の開発と患者への適用には余念がない研究者たち。「もしかしたらうまくいくかもしれない」技術を突きつけられるがゆえに、たとえ高額になろうとも心身の負担が大きくとも、「うまくいく」まで試し続けねば、というところに追い込まれる患者。その焦りに乗じて、本来あるべき「不妊治療の現状を正しく説明された上で、それを選択するか否かを判断する」プロセスを飛ばし、患者の納得のための相談や心身の負担へのケアを軽視しがちな医療機関。

アンケートに記された声を表層的に紹介するだけでなく、こうした不妊治療の「推進 - 受け入れ」の構図がいかに成り立っているのか、それを変える契機はどこにあるのかを探っていかねばならない。そのためには以下の「不妊の基本的な問題」にまとめたような多角的な視点からこの問題をとらえていくべきだろう（アンケートからはこの視点の 5 番目だけがいきおいクローズアップされがちだが）。

◆不妊についての基本的な問題◆
1）「子どもができない」は病気なのか？
2）「子どもを産む／持つ」ことを可能にする技術の開発はどこまで容認されるべきか？
　いかなる「子どもを産む／持つ」やり方が社会的に容認されるべきか？
3）安全性は保証されるのか（患者の身体の、生まれてくる子どもの、そのまた子どもの）？
4）不妊の環境的原因に目が向けられているのか？
5）患者にとって納得のいく適切な治療となっているのか？
　患者にとって必要な情報が公開され、適切な社会的支援がなされているのか？
6）不妊治療にも使えるものとして開発される様々な生命操作技術が「新優生社会」「生命の商品化・資源化」の実現を招いていく恐れがあることをどうとらえるか？
7）「不妊治療を受けない」という選択がもっとあたりまえに受け入れられる素地を作ることはどうしたら可能か？

アンケートからもこの多角的な視点に通じるような当事者の声を拾い出し、次回の報告で、もう一歩踏み込んだ考察を示せるよう努めたい。

平成 16 年度 JST「社会技術」助成研究の中間報告　第 4 回

患者学的アプローチによる「医の知」のフレームづくり

だれにも健康は欠かせません。よく「健康第一」とか「命あっての物種」などと言いますが、健康は安心して生活を送るための基礎です。けれども健康は、つねに生活のなかで脅かされているものです。

たとえば近年では、偏食・飲酒・喫煙・睡眠不足の蓄積がひき起こす、肥満や糖尿病など生活習慣病が注目されています。これらはひどくなると、いわゆる脳卒中や心臓病の引き金となります。また、職業上のプレッシャーや過労、学校や家庭・近隣でのストレスからくる、心身症や神経疾患にも注意が必要です。わが国では近年、自殺者が急増しており、最近 6 年間の数は交通事故死者数の 3 倍以上、毎日約 100 人のペースに上り、フランスの約 1.5 倍、イギリスやイタリアの約 3 倍に達していますが、そこにはこうした心身症や神経疾患の影響が考えられます。

他方で、自然環境破壊がすすむにつれて汚染物質や病原体も増えています。ダイオキシンやフロン、アスベストによる被害はよく知られたところです。なかには発ガン性有害物質ばかりでなく、様々なアレルギー性疾患の病原体も見られます。

従来､健康に対する被害は一般に「病気」として、もっぱら医学と、それを修めた医師たちによって解決が図られてきました。地球上から天然痘をなくしたことなどは、その大きな成果のひとつです。しかし現代の生活習慣病や、ストレス性・アレルギー性の疾患が相手となると、これまでどおりの対応ではうまくいきません。これらは、自然界にいる細菌やウイルスといった外敵がひき起こす「感染症」とは異なります。むしろ人の手によってつくり出されたものや、自分たちの長年の生活のなかに原因は求められます。つまり、大なり小なり社会的な要因がみとめられるのです。

こうなると、医師がいくら頑張ったところで独り相撲となります。生活習慣病などは、発症した本人の社会的・物理的環境に原因があるのですから、患部を切り取ったり、薬を塗ったりすることでは、一時的に症状がおさまったとしても完全には治せません。そこで、われわれは頭を切り替えねばなりません。

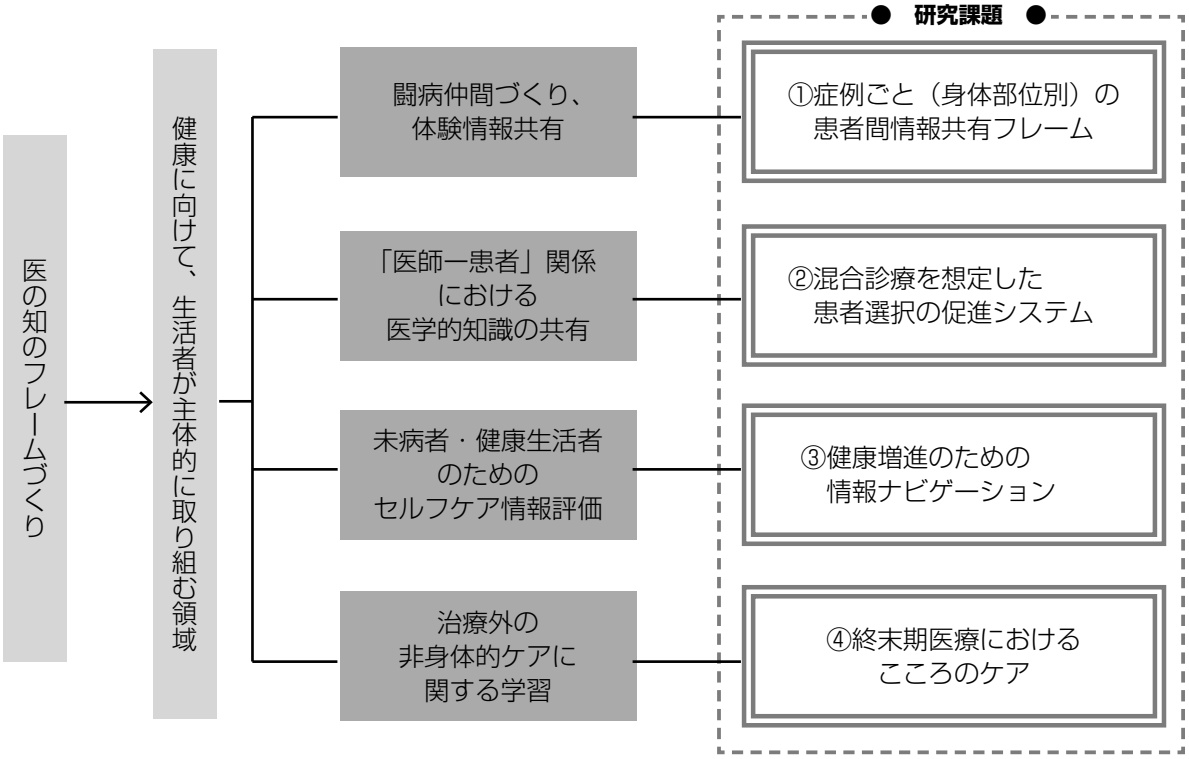
一つには、完治の難しい現代の疾患の多くは、患者本人にとっては「持病」の性格をもちます。ほとんどが「慢性疾患」に相当します。このなかには、高齢社会の進展にともなって大きな問題になる、老化からくるさまざまな機能障害も含まれます。じつにこれからの医療は、急性の感染症とは対照的な、そうした慢性疾患を主たる相手とするわけです。したがって患者の側でも、必ずしも治りきらない症状と上手につきあってゆくべく、継続的なケアに与るというのが一般的となります。

そこで二つめに、これが大事ですが、慢性的な疾患に対する治療効果を少しでも上げようとすれば、医師は患者側の積極的な協力を求めねばなりません。全快に向け医師と患者がパートナーシップを組むのです。これまでのパターンでは、薬の苦さ、注射の痛さを我慢して、黙って医師の言うとおりにするのがよい患者でした。その結果、首尾よく治療が行なわれると思われてきました。しかし今は違います。患者は意思表示をし、治療について積極的に口出しすべきなのです。「お任せ医療」ではうまくいかないのです。

この点、10 年前には「ガン告知」も憚られましたが、今ではインフォームドコンセント (説明と同意) が常識となっています。しかしセカンドオピニオン (主治医以外の診断) となると、まだ受け入れられにくいようです。

さて、このように患者の主体性が重視されてきています。その中核には、まぎれもなく生活者の視点が存在しています。健康をめざした患者の積極的態度は、生活者が日常心がけている「予防」や「体力づくり」の同一線上にあります。JST 研究「生活者の視点に立った科学知の編集と実践的活用」では、そのような生活に根ざした患者の主体性――これを「患者力」と呼ぶ――にも焦点を当てます。その際には、慢性疾患の多くが日常生活に由来することに鑑みて、生活の場にいて自覚症状のない、潜在的な患者である「未病者」にも目を配ることになります。医学の知を､個人の心身の健康に資するものとして、いかに編集･活用するか。生活者の側からみた「〈医の知〉のフレームづくり」にとりかかります。

患者学的アプローチによる「医の知」



そこでより具体的には、生活に即して、患者や未病者が主体性を発揮する領域として、次のものを設定しています。

①患者会に典型的な、闘病仲間づくりと、そこでの闘病体験に関する情報共有

②インフォームドコンセントをはじめ「医師ー患者」間にみられる知識の共有

③未病者や健常者による健康増進と、関連するセルフケア情報の評価

④終末期医療における心のケアと、それに先立つ患者の自己学習

これらはいずれも、積極的に周囲の医学的知識や健康情報を活用すべく、みずから情報を評価・取捨選択する場面です。また医師の独断では、結論のでない事柄ばかりです。

なかでも③では、口コミや噂など不確かな情報も数多く、健康食品や民間療法など、インターネット上に氾濫する情報は玉石混淆の状態です。それが元でトラブルや事故が発生しているのは周知の通りです。また、客観的な科学的根拠を有する知識・情報であるかという点では、たとえテレビ放送であっても鵜呑みにはできません。流行の健康番組の多くは、短期取材のため一過性の断片的な知識に偏りがちです。日進月歩の科学知を、長期間継続してフォローする体制も備えていません。加えて民放の場合は、暗にスポンサー企業のヘルシー製品を購入するよう､動機づけする構成や演出も少なくありません。

生活者が、みずからの生活を通して、健康を持続させるために有効な情報を選り分けるフレームとは、いったいどのようなものでしょうか。そこに必要な基礎的なカテゴリーとパラメータを同定しながら、われわれは本研究をつうじて、あるべき姿を探ろうとしています。

（文責：未来工学研究所 中島裕明）

台湾海峡両岸関係と日本
－ワールド・ワークの ファシリテイターとして－

塩出浩和
城西国際大学専任講師（中国近代史）

日本の大学で中国近代史を教えているが、わたくしのクラスには中国出身者と台湾出身者も数多く出席している。表面上、両地域出身者は親しく試験やアルバイトにかんする情報の交換をし、ランチの時も一緒で、とても関係は良い。その関係を、授業の余談としてかれらに発した質問で壊してしまったことがある。

「皆さん、台湾海峡両岸の関係についてどう思いますか」と訊いたのである。教室の雰囲気が一瞬にして変わってしまった。皆、極度に緊張する。ひとりひとりに「あなたはどう思いますか」と笑顔で語りかける。「私自身の考えは別にありません」「先生 , その質問は強すぎます」。

そこで、訊き方を変えてみた。「では、自分の考えは述べなくてもよいから、一般に中華人民共和国 (台湾出身者には「台湾」と言い換える) の普通の人々はどう考えていますか」。

すると、台湾出身者の中からぽつぽつと発言するものがあった。「多くのひとは現状維持を望んでいますが、わたしの友達の中には独立を志向するひともいます」。次に、大陸出身者も発言する。「台湾は中国の一部であるとみんな考えています」。しかしこのように質問しても「その質問にも答えたくありません」「敏感すぎます」としか応じない中国人留学生が多い。

城西国際大学：日本人学生のほかに多くの留学生が学んでいる

日本には、ビジネスマンも留学生も海峡両岸から多数来ている。那覇や本土の各空港 (とりわけ福岡と関空など、西日本の各空港) は、台湾と上海・北京などを行き交う台湾の人で混雑している。このような日本の「地理的」位置は、マカオと香港に似ている。たくさんの台湾人観光客と「台商」(中国大陸に投資している台湾の人をこう呼ぶ) は、マカオ国際空港で「便名変更」をおこなって台湾諸都市と大陸を実質的に「直行」で結ぶ「マカオ航空公司」を利用する。香港国際空港で、「中華航空」「エバー・エアー」(どちらも台湾の航空会社) 便から「中国南方航空」や「中国東方航空」に乗り継ぐひとも多い。

政治的な面で、日本が両岸関係に関与できる余地は小さい。この点も、マカオ・香港に似ている。ただし、「文化」や「人の交流」の側面から、日本は両岸関係の安定と発展には寄与できるのではないか。

クラスに戻ってみよう。留学生の答えに満足できないので、もう一歩踏み込んだ訊き方をした。「教室のなかでの発言はお互いに誰がしたか外部で話さないことにしましょう。では、自分自身の考えを述べられる人はいますか」。するとようやく本音を話す者が出てくる。「台湾は即時中国に復帰すべきです」と大陸出身者。「中国は統一を台湾に強制するべきではありません」「武力による威嚇はよくないです」と台湾側からは応じる。

対話が活発化する。途中から皆中国語で発言しだす。こんな話は同じキャンパスで四年間ともに過ごしても、めったにしないのである。わたくしの「挑発」にのって両岸の「対話」が促進される。

大切なことは、このとき日本人の指導者が (教室のなかでなら教師であるわたくし自身が)、どちらの意見を支持するとか、片方の言い分の間違いを指摘するとかといったことをしないことである。ただ、対話の場所を提供する。「仲介者」にもならない。控えめな「ファシリテイター」になればよい (注)。中国語を話す者同士のあいだに日本人が立つ必要はない。部屋を貸し、きっかけを作るだけでよい。

この授業以来、あきらかに学内の中台関係が変化した。あちこちで、「台湾当局は、飛行機の定期便直航を認めるべきだ」「それには、わたしたちの島に対する武力による威嚇をそちらが先に止めることが必要でしょ」といった真の「政治対話」が本音ではじまり、相互理解と友情も深まる。一度、怒りの感情を表出しないと、本当の「対話」は始まらない。

日本政府も、「中華人民共和国」と「中華民国 (台湾)」の間で同じ役割を果たすことができる。これは、表でやらなくてもよい。特に最初は、裏でこっそりするのである。外務省は大陸の外交部とは公式のルートがあり、台湾の当局とは「非公式かつ民間」の交流協会ルートを持っている。

「対話」後の留学生たち

「靖国」と「尖閣」(釣魚台)を含めた歴史問題や領土紛争が日中間にはある。これら問題の即時のかつ互いに満足できる解決は実現困難である。しかし、中台間で控えめな、そして公正なミディエイターとなることはできる。それは、東アジア地域で戦争を防止するという日本の国益にもかなう。やがては、両岸市民からの「政治的信頼」も獲得できよう。端的に言えば、破綻状態の日中関係修復にも結びつくのである。政府ができなければ、わたしたち市民からはじめよう。皆さんの町内に中国人と台湾人がたくさん住んでいます。機会があったら「わが家」に呼んで、食事会を開くだけでよいのです。

(注)アーノルド・ミンデルのことば。「ワールド・ワーク」という作業における「対話の促進者」。「自覚の政治学」における「霊的なリーダー」の役割と重なる。政治学の分野では、ハンナ・アーレントの「理想の政治・ことばによる真の政治・人間活動の最高形態としての政治」という諸概念にも通じる。なお、ミンデルの思想と実践については、札幌在住の政治学者、渡辺まどか氏のご教示を受けた。記して感謝したい。Arnold Mindell, Sitting in the Fire, (Lao Tse Press, 1995) を参照のこと。当該書の部分的な翻訳は講談社現代新書として『紛争の心理学』(2001 年、永沢哲監修、青木聡訳)のタイトルで出版されている。

市民科学研究室

夏合宿報告

今年の夏合宿は、市民科学研究室にとってなじみが深い神奈川県藤野町で実施しました。藤野町には、地域の人々によって長年守り伝えられてきた伝統芸能がある一方、芸術家や有機農業などの団体が多く移り住んで創作活動に励んでいることから、独特の趣があります。散策の道すがら、そうした芸術家の作品を見ることもできました。また、合宿前に行われた町長選挙や住民投票の結果、相模原市との合併の方向へ進んでいるというお話も、地元の方から耳にすることがあり、町の今後に対する関心の高さが伺えました。

●第1日目：7月29日

夕方、藤野町に集合。夕食後、明日の見学のコーディネートをしてくださる野元好美さんを交えて参加者の簡単な自己紹介をし、小林一朗さんからは、「みどりの会議」から立候補した経緯や現在の活動についてのお話。若者の投票率の低さに関する話題では、「自分たちの力で何かを変えたという経験が必要」という教育の話に発展していきました。さらに、上田さんからヨーロッパ取材報告。WHO ワークショップに参加したお話や、スイス、オランダ、ドイツ各国の予防原則に関する取り組みについて報告がありました。

●第2日目：7月30日

朝食後、まず上田さんから、生命操作プロジェクトで現在解析を進めている、ベビーコムが実施した不妊に関するアンケートから見える不妊治療の現状や問題についての報告。続いて、台湾の生殖医療の研究をされているチャン・チョンファンさんから、台湾の不妊治療に関するお話を伺い、文化や価値観による違いを知ることができました。

その後、宿を出発し、自然農を実践している畑を見学し、お話を伺いました。「雑草などに負けそうなときにだけ手を貸し、自然の力にゆだねる。問題が起こったら自然と折り合いをつけて工夫していく」というお話が印象的でした。畑の周りは、涼しい空気が穏やかに流れているようなところでした。

パーマカルチャーセンターで昼食をいただき、循環型システム、海外でのエコビレッジの実践例をお話いただきました。さらに廃校を利用した「篠原の里」を訪問。そこで横山功さんから風呂敷の活用法を伝授。技を紹介するたびに歓声があがります。昔の人の知恵と、モノを大切にする心が表れていたように思います。

夕食後、低線量被曝プロジェクトの瀬川さんから「放射線のリスクを知る」の発表。医療の診断で使われる放射線、その単位である「SV(シーベルト)」の説明など、知ることで初めて選択することができるということを改めて実感するお話でした。

●第3日目：7月31日

最終日。朝食後、東京湾の漁師さんを取材されている鴇田さん、真鍋さんからのお話。漁業を守らない政策がとられた後も漁業を続ける漁師さんたちの姿を、写真も使ってご紹介いただきました。仕掛けや漁法が意外とシンプルなことも印象的でした。身近な東京湾の漁師さんの話は意外と知られておらず、一緒に見学に行こうというご提案をいただき、是非行きたいという声が上がりました。

お昼ごろ藤野駅で解散しました。参加者は 20 名でした。

●連載読み物●

出生前診断

～イギリスからのレポート～

第８回

written by 渡部麻衣子 Warwick 大学社会学部博士課程３年
(Maiko.Watanabe@warwick.ac.uk)

写真展

■はじめに

前回は、選択的中絶を義務とするキッチャーの主張を紹介しました。そして、そのような主張は、論理的に無理があるだけでなく、女性の自己決定権も侵害することを指摘してきしました。今回は、先月はじめにロンドンで行われた､ある写真展の紹介から始めたいと思います。

■ Shifting Perspective: 視点を変える

7 月 6 日から 10 日にかけて、ロンドンの OXO タワーミュージアムで、「Shifting Perspective: 視点を変える」と銘打つ写真展が開かれました。テロの影響で残念ながら行くのを断念したのですが、後日ウェブサイトから、開催中の会場の様子を知ることができました。この写真展は、それぞれダウン症の子の親でもある 5 人の写真家によって企画されたもので、その目的は、タイトルからも予想できるように社会にあるダウン症に対する偏見に挑戦することにありました。開催中は 1500 人の来訪者を迎え、作品は趣旨に賛同した英国ダウン症協会の事務所に永久展示されることとなりました。

展覧会の様子[1]

■写真の力

ダウン症の人の最初の写真[2]

この写真展で興味深いのは、写真が社会にある偏見に挑戦するだけの力を持つということを示している点です。写真は、一見するとカメラという装置を媒介にした客観的な「情報」です。実際、ダウン症についての基礎的な研究がまだ発展途上だった時代、医学論文にも、ダウン症についての情報の一つとして、写真やスケッチが掲載されました。しかし、同時に写真は主観を表現する芸術でもあります。客観的な情報が主観的芸術となり得るのは、その情報をどうみるかという主観的問題が、情報を受け取る側の理解にとって重要な意味を持つからではないでしょうか。

■写真展における視点

反響を呼んだダウン症の子ども達のポートレート

写真展で最も反響を呼んだのは、おそらく壁一面に並べた 365 人のダウン症の子ども達のポートレート[3]でしょう。これは雑誌の表紙も飾りました。写真展の企画者の一人で、ダウン症の娘を持つリチャード・ベイリーは、この作品によって「私たちの子どもは一人一人違うのだということを示したかった」（BBC News）[4]と述べています。ベイリーは子ども達の「個性」に視点を集中させるために、モデルの服装を黒い T シャツに、構成を肩から上に統一しました。

ベイリーはインタビューの中で、ダウン症の子の個性への視点は、ダウン症の娘を持ってはじめて獲得したものだとも述べました。それは親の視点なのです。

障碍学のブレット（2002）[5]は、親が障碍に対し、「医学的」でも「社会的」でもない､言ってみれば「日常的」な視点を持っていることに注目し、障碍の「ペアレンタル・モデル」と名づけました。写真展は、この「ペアレンタル・モデル」から、一般化された（医学的な）ダウン症への視点に挑戦する試みとも言うことができます。

■一般化された視点

アレクサ・ライトの
ダウン症の女性の合成写真（部分）[6]

では、ダウン症に対する一般化された視点とはどのような視点なのでしょうか。この点について、アレクサ･ライト（Alexa Wright）という写真家が面白い作品を発表しています｡彼女は、『I』という作品の中で、身体的障碍のある人の肖像写真と、障碍のない人の肖像写真を、障碍の部分だけを残して合成するという方法で、イメージとしての

障碍を表現しました。ライトはこの方法によって、自己は身体に表現されるという通常の視点を揺るがし、身体は必ずしも自己の適切な表現ではないということを表そうとしたと述べています。「(身体と自己の) この不一致は、障碍を持った人たち、その中でも、顔の作りが特定の人格と知的能力をあらわしていると見られている、ダウン症の人たちについて考える時、特に明らかだ (Wright, 2002: 507)」。つまり、ダウン症についての理解は「容姿」によって一般化されていると言えます。さらに重要な点はそれが「負のイメージ」として一般化されている――つまりスティグマ化されている――という点です。

■二つの視点の可能性

写真展は、逆に「容姿」の多様さを強調することで、一般化された負のイメージを忽せにします。ダウン症協会の医療顧問をつとめて来たマーダー医師は写真展について、今まではダウン症について悲観的な情報が多すぎた、このような明るい情報ももっと提供されるべきだと述べました (BBC News)。これは、ダウン症に関する情報には悲観的と楽観的、あるいは「負の情報」と「明るい情報」の二つの方向性があり得ることを示しています。

■自己決定における選択肢

この点は、出生前診断における自己決定にとって特に重要です。今やイギリスでも、出生前診断においては女性の自己決定は尊重するという鉄則があります。しかし、自己決定における選択肢については、「障碍のある子を産む / 産まない」という結果に比重がおかれているように思います。結果の選択の前提となる障碍への理解はあまり注目されていません。けれど、障碍の理解には二つの方向の視点があり得るということを知ることも、結果の自己決定にとって必要ではないでしょうか。

■おわりに

近年イギリスでも、今回紹介した写真展をはじめ、ウェブサイト、テレビ番組等を通して、ダウン症への多様な視点が紹介され始めています。これらは、多様な視点の中から選択できてはじめて可能になる「自己決定」の条件を整える地道な試みです。しかし、同時に、そこで提示される視点は、究極的には出生前診断の妥当性を揺るがし得るという点も、付け加えておきたいと思います。

Campos F. M.
Maternal Bond.

1：展覧会の様子 http://www.shiftingperspectives.co.uk/
2：ダウン症の人の最初の写真 Smith, G. F. and Berg, J. M. 1976. Down's Anomaly, Churchill Livingstone.
3：Bailey, R. *Not all are the same*（部分）at Viewpoint 表紙 .
4：Elliot, J. 2005. "Each of Our Children is Different" BBC News 16 July. http://news.bbc.co.uk/1/hi/health/4685639.stm
5：Brett, J. 2002. "The Experience of Disability from the Perspective of Children with Profound Impairment: is it time for an alternative model of disability?" Disability & Society 17(7):825-843.
6：ダウン症の女性の合成写真（部分）Wright, Alexa. 2002. 'I'. In Breckenridge, C. and Vogler, C. "The Critical Limits of Embodiment: reflections on disability criticism". *Public Culture*13(3): 506-510.

お知らせ

下記のフォーラムにおいて、市民科学研究室の上田、小島、古田が研究報告します。みなさま是非ご参加ください。

第５回「リビング・サイエンス・フォーラム」

日時：2005 年 9 月 28 日 (水)18:30 ～ 21:30
会場：東京 21C クラブ (丸ビル 7F)
参加費：1000 円
主催：リビング・サイエンス・ラボ、協力 : 智財創造ラボ

市民科学研究室・科学館プロジェクトより、現状の科学館の課題について、アンケート調査結果をもとに発表するとともに、科学館·博物館を運営する立場、利用·評価する立場、発表・展示する立場から、それぞれ現状や今後についてお話をいただきます。

申し込み先：tt@socioengine.co.jp
(9/14 までにお申し込み下さい)
問い合わせ先：リビング・サイエンス・ラボ事務局
(TEL:03-5775-7670)

第 1 部：研究発表・トピックス
1.「WHO 等海外取材報告と IH 調査研究報告」: 上田昌文
2.「食の総合科学プロジェクトからの報告」: 小島玲子

第 2 部 : パネルディスカッション
テーマ :「科学館の新しい使い方
―ハコモノからコミュニケーションの場へ―」
モデレーター：佐倉統 (東京大学)
ゲスト・スピーカー
境真理子 (江戸川大学マスコミ学科教授)
山本育夫 (つなぐ NPO 理事長)
八谷和彦 (メディアアーティスト)
古田ゆかり (市民科学研究室・科学館 PJ リーダー)

PJ report

■ 宇宙開発再考プロジェクト ■

文責：河野弘毅

スペースシャトルの引退計画と「きぼう」の運命

スペースシャトルの運行が再開された。2003 年 2 月 1 日に帰還中のコロンビアが空中分解で失われてから、二年半ぶりの運行再開であり、NHK では日本人宇宙飛行士野口聡一さんのニュースを毎日のように流し、JAXA のホームページでもこのフライト (STS-114) と野口さんの紹介に力を入れている。

だが、今回運行を再開したスペースシャトルは、ブッシュ大統領が 2004 年 1 月 15 日に発表した方針にもとづいて国際宇宙ステーション (ISS) の完成と同時に引退することがすでに確定している。当初その時期は 2010 年に予定されていたが、現有のオービター[1]3 機を 2007 年、2009 年、2010 年に段階的に引退させるプランを検討中との報道もある。

ニュースサイト NASA Watch の報道[2] によると NASA がシャトルの引退を急ぐ理由は二つある。ひとつは「金食い虫」であるシャトルを少しでも早く終わらせ、浮いた予算を大統領命令である「月火星計画」へまわすため。ブッシュ大統領は、その「月火星計画」のために 2010 年までに必要となる予算 120 億ドルのうち純増額は 10 億ドルのみとし、残りの 110 億ドルは 2010 年までの NASA の総予算 860 億ドルを再配分してひねりだすように指示している。シャトルの打上げには 500 億円 (コロンビア事故後は一説では 800 億円) 掛かるが、代替輸送機関であるロシアのソユーズの打上げには 20 億円しか掛からない (松浦氏による)。シャトルの飛行回数をオービターの段階的引退により現在予定されている 28 ～ 30 回から 12 ～ 15 回に削減し、その一部をソユーズで代替できれば、差額で再配分の穴を埋められる計算になる。

引退を急ぐもうひとつの理由は、グリフィン長官が三度目のシャトル事故を恐れているためである。グリフィン長官は運行開始から 20 年を経過したオービターの老朽化が三度目の惨事の要因となることを懸念している、と報じられている。飛行が可能なスペースシャトルのオービターは過去に全部で 5 機製造され、このうちチャレンジャー (OV-99) が 1986 年の事故で、またコロンビア (OV-102) が 2003 年の事故で失われている。STS-114 で飛行したディスカバリー (OV-103) は 1984 年に就航し、今回が 4 年ぶり 31 回目のフライトになる。残りの 2 機 (アトランティス : OV-104、1985 年就航、フライト実績 26 回、およびエンデバー :OV-105、1992 年就航、フライト実績 19 回) と比較すると、早期引退させるのはディスカバリーと考えるのが自然だろう。

もともとブッシュ大統領の計画では、2010 年にシャトルが引退したあと次世代の有人宇宙輸送手段 (CEV) の就航予定である 2014 年までに 4 年間のブランクがあり、この期間アメリカは自国の宇宙飛行士の ISS への送迎すらロシアに依存しなければならないという「屈辱的な」状況である。米国議会には、この事態をよしとせずシャトルの引退を CEV 運行開始まで延長するべきだとの意見もある。シャトルの段階的引退計画の背景には、このような議会のシャトル延命の圧力を封じ込めたいとするブッシュ政権のスタッフの意向が反映されている、と同報道はみている。

NASA 首脳については、前任者のオキーフ長官は段階的引退には反対の立場だったが、四月に着任したグリフィン現長官は前向きの姿勢と報じられている。そのような首脳の意向を受けてかどうかは分からないが、同報道後に打ち上げられた STS-114 では、打上げ時に再発した外部タンク断熱材の剥離問題を約 200 名の専門家が調査中であり、この技術的問題に対する解決策が得られるまで次回のシャトル打上げは凍結するとの方針が公表されている。グリフィン長官自身、自前の有人宇宙輸送手段にブランクが生じることは受け入れがたいとのコメントを出しているので、CEV の就航を 2014 年よりも前倒しして実現できるという腹案があるのかもしれない。

予算と事故の観点からは、以上のようにシャトル早期引退は妥当なシナリオに見えるが、「それで約束の ISS はどうなる ?」との疑問は当然起きる。シャトルの段階的引退が実現すれば、ISS 計画は当然さらに大幅縮小されるしかあるまい。2003 年 6 月にケネディ宇宙基地に搬入されたままで打上げのメドもたたずに待たされている日本実験棟「きぼう」は、いったいどうなるのだろう。

コロンビア事故以後のスペースシャトルは「復活すること」自体に大きな意味があったわけで、その公約を果たした今、米国の宇宙政策の主題はシャトルのスムーズな引退と ISS の「落としどころ」模索の二点にすでに移っている。本号が読者の手元に届く頃には、NASA 内部の ESAS（Exploration Systems Architecture Study）および S-SCOT(Shuttle-Station Concepts and Options Team) から、シャトル、ISS、CEV に関する提言が提出される。これらの提言が「きぼう」の運命を決めることになるのかもしれない。

参考文献 : 松浦晋也『スペースシャトルの落日～失われた 24 年間の真実～』

1：オービターとはスペースシャトルの宇宙船本体を指す。スペースシャトルはこのオービターと、固体ロケットブースタ、外部燃料タンクからなっており、外部燃料タンク以外が再利用されている。

2：NASA and White House Discuss Early Shuttle Fleet Retirement
http://www.spaceref.com/news/viewnews.html?id=1048

PJ report

■ 水と土のプロジェクト ■

文責：森 元之

「土のバーチャル博物館」構想アイデア探求の旅⑧

■旅の終わりの絵画展

東京から始まり、北陸を経て青森に行った旅。それはいくつもの博物館や展示物・表現スタイルを見ながら、将来の「土の科学館」を構想・構築するときのヒントとなるアイデアをつむぐ旅でした。それがようやく終わり、東京に戻ってから、最後にもう一つ絵画展を見ました。それは、東京オペラシティで開催された「野又穫：カンヴァスに立つ建築」という絵画展でした。

そこを訪れたのにはいくつかの理由が重なっています。野又氏の不思議な建築構造物を描いた一連の作品群に私は以前から魅了され、いつか現物を見たいと思っていたこと。同時に、この旅のはじめのころに訪れた金沢21世紀美術館で展示されていたヴォルフガング・ティルマンスという作家の展覧会と、野又氏の展覧会が東京オペラシティにて同時期に開催されていることを知り、会期中に見に行きたいと予定していたこと。さらには、青森から東京へ帰る列車の中で読んでいた、その日の朝日新聞の書評コーナーに小説家の石井衣良氏の新刊『ブルータワー』の書評が載っていたのですが、その本のカバーデザインに使われている絵が野又穫氏の作品であったこと。こうしたいくつかの偶然というか必然がつながったこともあり、青森から東京に帰りついた後、自宅に戻る前に旅の仕上げという気持ちもあって絵画展に行ったのです。

■幻想空間からの回帰先としての博物館

野又穫氏の作品群は、一言で言えば「空想建築」とでも言うべきものでしょうか。ありそうでなさそう、なさそうなんだけれども、どこかちゃんと建築学的に裏打ちされた精密な構造になっているので安心して見られる、という作品です。建築途中の足場、ワイヤーの張り方、階段、壁、柱などの建築の部分品のこまかな絵画的描写は具体的でリアルだけれども、構築されている建築物全体の配置は、現実には作らないだろう、あるいは何の目的でつくるのか、といった印象を受ける。そんな作品が多いのです。特に彼は、塔やタワー状の建築物を繰り返し描いています。

私はこの野又氏の作る作品世界から、土の博物館構想の目指す方向性の示唆を感じ取っています。高度な科学に裏打ちされて成り立っている私たちの世界においても、一方では、土や水という自然物の世界を理解したり伝えたりするときの手法として、野又氏の作る幻想空間の描写方法に、学ぶべきところがあると思うからです。

野又氏の作品を見ていると、「お金と作りあげたいという人々の意思があれば、おそらく建築技術的にはそれほど大変な課題もなく、現時点で人類が持っている建築工法や技術を組み合わせればすぐに建築可能だ」という印象を受けてしまいます。それは製図を引くような論理構築がその絵から感じ取れるからであり、この地球上のどこかにある建築物またはその工事現場をそのまま描写したような絵画的表現の安心感が、このような印象を与えてくれるのでしょう。

学歴とか偏差値とかという狭い意味ではなく、社会全体とそこに属する個々人の知見・知識が高度になってしまった現在の私たちにとっては、水や土の大切さや魅力を、感覚的に説明することも大事だけれども、同時に論理的に納得して共感してもらうことも必要であるということを、野又氏の作品世界から考えさせられるのです。幻想や空想というものも、実は個別の部分を構築する論理は非常に緻密で、なおかつ現実に沿ったものである必要があること。しかし、そうして作り上げられた世界観や作品群は、私たちの現実に対して切り込む鋭さを持ち、ときには現実世界を揺るがすような批判精神をも包含している必要があると感じています。

■ありがとうございました。

8回にわたりつたない旅の文章にお付き合いくださり、ありがとうございました。この連載は今回で終了いたします。土の博物館構想はまだまだバーチャルな世界にあり、さらにその端緒についたばかりで、リアルな姿にたどり着くにはまだまだ時間がかかりそうです。しばしお休みをいただき、アイデアや構想が次のステップに行きましたら、あらためてお目にかかりたいと考えています。

参考文献：「野又穫作品集 Points of View 視線の変遷」東京書籍

7 月の活動日誌

1	いるふぁ・大谷ゆみこさん　インタビュー	16	ナノテク英国報告書翻訳作業
2	電磁波プロジェクト勉強会	17	ナノテクリスクプロジェクト勉強会
3	手づくり衛星作成	18	
4		19	JST マッピング、 IH クッキングヒーター計測（家庭訪問）
5		20	JST 打ち合わせ（未来工学研究所）
6		21	天神山子ども教室、 東京大学にて水需要に関する取材（JST 関連）
7	天神山子ども教室	22	IH クッキングヒーター計測（家庭訪問）
8		23	IH クッキングヒーター計測（家庭訪問）
9		24	IH クッキングヒーター計測（家庭訪問）
10		25	食の総合科学プロジェクト勉強会
11	『市民科学』編集会議、松原さんインタビュー	26	
12	低線量被曝プロジェクト勉強会	27	JST 定例会合、リビングサイエンス定例会合
13		28	リビングサイエンス編集会議 天神山子ども教室
14	天神山子ども教室	29	市民科学研究室夏合宿（藤野町）
15	生命操作プロジェクト勉強会	30, 31	市民科学研究室夏合宿（藤野町）

会計報告

（7 月度分）

＜収入＞				＜支出＞					
研究会参加費	12,000	寄付	139,984	消耗品費	1,027	スタッフ手当て	8,000	資料代	3,160
会費	35,670	その他	3,700	郵送費	29,480	通信費	2,625	謝礼	20,000
売上げ	50,870	【合計 242,224 円】		会場使用料	2,500	交通費	2,000	その他	400
						会議費	6,190	【合計 75,382 円】	

編集後記

厳しい残暑が続く“熱の島”東京から、第５号をお届けします。◆深夜になっても気温が 28℃、という状態にうんざりしない人はいないと思いますが、改善の兆しすらありません。大谷さんのお話は、この問題にも通じる面が大きいですね。◆今回は投稿原稿を１本掲載しました。投稿をどのようなかたちで受理していくかは、まだ詰められていないのですが、むしろ書き手の皆さんの意欲に後押ししていただければと思います。（O）

市民科学 2005 年９月号（第５号）
●
2005 年９月発行
●
発行人：NPO 法人市民科学研究室
●
http://www.csij.org/
〒 113-0033　文京区本郷 6-18-1
TEL&FAX　03-3816-0574
e-mail：info@csij.org（事務局あて）
●
本体一部 200 円（送料込みで 300 円）